

# 固有名詞についての覚え書

## —ENGLAND の場合—

中 村 敬

### 第 1 章

固有名詞としての国名は元来国と国を区別するための一種の符牒であって、意味は個別的 (particularistic) で、無価値であるはずだが、言語社会学的にはしばしば普遍的 (universalistic) な意味をもってわれわれの価値観を形成する。極く卑近な例では「チョーセン」がある。「朝鮮」は言語学的には朝鮮半島そのものと半島に存在して来た国家全体を示す固有名詞に過ぎないが、言語社会学的には時として民族差別 (racism) を象徴することばのひとつとして多くの韓国・朝鮮の人々によって忌み嫌われて来た。

以上のように固有名詞が単なる記号以上のものとして機能し得るとするのならば、固有名詞としての国名がどのような意味で使われているかは決して小さな問題ではない。とりわけ歴史的に見て、日本の近代化にもっとも関係が深い国——英国——の名称にどのような言語社会学的問題があるのかは一度は明確にしておくだけの価値があるように思われる。

英国がイングランド・ウェールズ・スコットランド・北アイルランドのよっつの独立した地域から成立していることはことさらに言及するほどの問題ではないように思われるが、ことは決してそれほど単純ではない。それは、「英国」という訳語の原基になっている England が、本来上述のよっつの地域のひとつを指す名称でもあり、しかも、歴史的には他のみっつの地域を征服して形式的に英国の統一を成し遂げた、いわば、政治的・文化的にも優勢な地域の名称でもあるからである。つま

り、逆説的には England を「英国」と訳すことによって、本来ならば イングランドというひとつの地方を指すべきはずの名称を、よっつの地域にまたがる名称として拡大解釈する重大な誤解のきっかけが与えられたように思われる。

この覚え書で述べようとするのは、そのような拡大解釈がいかに日本人の英国観やひいては英語観を根本のところまで歪めて来たかということと、それを是正するひとつの手段として辞書の England の項から「英国、イギリス」という訳語を追放すべきであるということであるが、まずは England=英国という等式がいかに我が国で定着しているかをいくつかのレベルに分けて例示しておきたい。

#### (1) 辞書の扱いはどうか

目を通した英和辞書は次の通りである——①『大英和辞典』(研究社、第5版)、②『アンカー英和辞典』(学習研究社、第2版)、③ *Shogakukan Random House English Japanese Dictionary* (小学館)、④『ユニオン英和辞典』(研究社、第2版)、⑤『英和辞典』(講談社)、⑥『ファースト英語学習辞典』(三省堂)、⑦『ホルト英和辞典』(三省堂)、⑧『新コンサイス』(三省堂)、⑨『グローバル英和辞典』(三省堂)、⑩『斎藤英和辞典』。

以上の辞書類は後述する⑩を除いて全て現代の辞書であるが、それらの辞書に共通する記述は、第1義に「イングランド」をあて、第2義として、「英国、イギリス」をあてるといった方式である。問題は第2義である。これについては、辞書によって訳語だけを与えているものもあれば、以下に述べるような説明を加えているものもある。①は「(一般に)英国」、②は「①漠然とした意味のことが多く、英本国にも英連邦にも用いる」、⑧は「(通俗に):=Great Britain」、⑨は「通俗に外国人が用いて」とそれぞれ注を与えている。

簡略化された学習辞典(あるいは単語集)では、しばしば「英国」という訳語をひとつだけ与えている場合があるが、これは論外である。ただその種の学習辞典や単語集がかなりの数に及んでいる現状は、はなはだ非教育的である、という事実だけは指摘しておきたい。さて、ここに引用した注も厳密にはことごとく問題である。まず、①の「一般に」とはどういうことか。本国人も外国人も共通にということか。それとも、公式名の United Kingdom of Great Britain & Northern Ireland では

長過ぎて発音しにくいので簡略化して England と一般に言っているということだろうか。いずれにせよ（一般的に）という注はこの用法が正しいと認めていることにもなるであろう。②には「ばく然とした意味」とあるが、〈ばく然とした〉の意味が不明であるのは①の場合と同じ。⑧の「通俗」も判らない。誰によって通俗に用いられるのか。⑨は、使用者を限定している点で他の辞書よりは注の内容が具体的で限定的であるのは好感が持てるが、この注にも問題がある。注の「外国人によって用いられる」に従えば、日本人は England=Great Britain では使わない、という論理的結論になるはずだからである。しかし、事実上、これも後に詳述するはずだが、ウェールズ・スコットランド・アイルランド諸地域に独自の文化圏を形成するケルト民族が、一地方の名称である England を拡大解釈して、「一般的に」「ばく然と」使うことは、一部のように Anglicize された人間以外は、まずない。ないどころか、そのように外国人が使うことは彼らにとっては、彼らの言語・民族・文化一般を認めないはなはだ insulting な行為で許し難い。

もちろん、ここに挙げた英和辞書が現在使われている全てのものではないが、一般的傾向を推し量るのには十分な資料だと思われる。以上の辞書の中で⑩『斎藤英和辞典』は1922年に発行されたもので、英学史上貴重な辞典だが、この辞典の記述が、England の訳語に「英国」のみをあてているのははなはだ示唆的だ。つまり、英語学習史の初期の段階から、英国と言えば England という等式ができていたということがこれによって裏付けられると思うからである。しかしながら明治の日本にとって、近代化のモデルであった英国の中心がイングランドであったわけだから、ウェールズ、その他英国内の少数民族の言語・文化がわれわれの大先輩の目に入らなかったとしてもそれなりの必然性があったと思うのである。問題はその伝統が今日の時点まで引き継がれ、その事実によくの人達が依然として気が付いていないところにある。例えば、『ホルト英和辞典』（三省堂）の English の項には「英国の、英国人の、英語の」があてられ、双解辞典の性格上その後には訳語の原基になった英語の説明が並ぶのだが、その英文の説明——of or pertaining to England, its people, or their language——を読むと、英和辞書の編集者の頭の中には England=Britain という構図がまるで、化学の方程式のように存在しているのではないかという思いにかられる。

例えば、研究社の『新和英中辞典』の *Eikoku* の項に *England* とある通り、和英辞書についても英和辞書と傾向は同じであるからここでは特にとり挙げない。次に英和辞書の訳語の原基になっている英々の辞書がいかなる記述をし、併せて英和辞書の訳語とどのような関係を示しているのか若干触れておきたい。まず英国の辞書から見てみようと思う。*LDCE* は *England* を *entry* に入れていない。ただし派生語の *English* には *belonging to England, its people, etc.* と説明し、*My father is English, but my mother is Scottish: they're both British.* という例文を挙げている。この例文から判る通り *LDCE* は *England* を *Britain* という意味では認めていないという立場をとっていることが判る。*OALDE* (*Oxford Advanced Learner's Dictionary of English*), *COD*<sup>6</sup>, *POD*<sup>6</sup> もほぼ同じだが、例文が出ていないので、*LDCE* ほど立場が明確ではない。明確ではないが、ほぼ *LDCE* と同じ立場であろうと推測できる記述はある。例えば、*COD* の *English* (英語) の項には *The language of England (now used in U. K., U. S. and in most Commonwealth countries, and often internationally)* といった目が覚めるような記述があるからである。この記述に従えば *English* の意味のひとつは「イングランド語」となるはずで、それはそれで事実即した正確な記述と言うべきではないか。ただし、英和辞書の中に「イングランド語」を載せてあるのはひとつもない。

さらに興味があるのは、*Longman English Larousse* が *England, Wales, Scotland* をそれぞれ *a country* と記述していることだ。*England* を「英国」と捉えている頭には、*England* を *country* と記述することになんの不思議もないであろうが、この場合の *country* は、「英国」「日本国」といった意味の *country* とは少し違う。*Larousse* の記述 [*a country (area 50, 331 sq. miles, pop. 43, 460.000) occupying the largest, southern part of Great Britain.*] には、*England=Great Britain* ではないという明確な視点が読み取れる。さらにまた、行政的にイングランドの一部という取扱いを受けて来たウェールズが *a country* と記述されているのも示唆的だ。実際、多くのウェールズ人がウェールズを *country* のひとつと捉えていることは事実で、そのことは現在は廃刊となっているウェールズの英文雑誌 *Arcade* (18 Sep. '81) に載った以下の投書にも読み取ることができる。

## Stranger at home

Sir,

For the last few years I have taken my holidays either along the Dyfed Coast or in Snowdonia. It seems very sad that so many people from the Southern Valleys of Wales choose to visit Eastbourne, Weymouth etc — and of course Porthcawl — rather than to venture into Western and Northern Wales.

I base this comment fairly confidently on A) knowing many people in the valleys who traditionally visit the resorts mentioned above and B) the almost impossible task of finding a Valley accent among people visiting the West coast.

The whole of the area from Anglesey down to St. David's is literally swamped with English visitors during the summer. On the beaches of the West Coast I cannot help but feel like a stranger in my own country.

What is equally sad is the natural reflex of the native Welsh speaker to speak first in English before even knowing what language one speaks. Also the standard of Welsh has declined, sounding more now like Wenglish. This I find rather demoralising, as one who is learning the language.

It is quite clear that the massive influx of English visitors for six months of the year — plus those who eventually settle here — will, if we are not careful, create a Wales which is nothing more than a geographical entity.

I urge Welsh people from the south to shake off the herd mentality of a Trecco Bay holiday, and get over to the west and north.

I also feel that the Wales Tourist Board could do more to promote Wales within Wales.

P. A. WILLIAMS,  
Bedwas,  
Gwent.

それでは米国系の辞書はどうか。*Webster*<sup>3</sup>, *Random House*, *American College Dictionary*, *Oxford American Dictionary* など、どれも英和辞書の「英国」に相当する意味領域を定義から排除し、イングランドという地域に限定している点は英国系の辞書の場合と変わらない。以上見て来た通り英々の辞書はほとんど全部と言ってよいほど、England=Great Britain という意味領域を認めていないのに、英和辞書類がそろいもそろって「英国」を訳語の一部に加えているのはいったいどういう訳だろうか。問題はふたつある。ひとつは、日本の英学会で絶対の規範として君臨して来た *OED* が、*England* の意味領域として、「loosely に Britain の意で使われる」という趣旨の説明を加えていることである。筆者は、この loosely が「一般に」「通俗に」といった英和辞書の説明の原基になっているのではないかと思う。前述した通り、この *OED* の説明も「誰によって」が明確にされていない点で不十分であるが、このことはもうひとつの問題とも関連して来る。つまり、問題は、辞書作りの原点を意味や語法の実態を正確に伝えることにおくのか、それとも実態を伝えるだけでなく、規範性をも加えるのかどうかという点にある。*OED* 以外の英々の辞書が（筆者が目を通した限りでは）全て *England* の意味領域を「イングランド」地方に限定しているのは、編集方針の背後に〈規範〉への志向性を読み取ることができるように思われる。これとは対照的に英和辞書の編集方針には、〈規範性〉よりも語法の実態を正確に伝える、つまり記述主義が貫かれていると考えたい。このような編集方針の問題点は、事柄を十分わきまえない学習者の誤用や誤解を助長することになりはしないかということである。たしかに、*England* は *OED* のいう通り、loosely に Britain の意味で使われているが、loosely に使っているのは、厳密には England=Britain とはならないということに無知な外国人か、英国内で *England* 以外の諸地域などは文化的後進地域として目にも入らないイングランドの一部の人間だからである。

外国人がいかにか *England* の意味を loosely に使っているのかは、アメリカ人と話していてもすぐ気が付くことだが、*Manual of Style and Usage*, The New York Times Book Company, 1976 の **English**, **Englishman (men)**, **Englishwoman (women)** の項の for the people of England, but not for the people of the United Kingdom. を読むと、アメリカ人にとっても *England* が誤解されていることばのひとつであ

ることがいっそうはっきりする〔イタリア人の歪められた英国像については資料(1)参照〕。アメリカ系のほとんどの辞書が *England* を正確に記述していながら、依然として誤解が解けていないのであるから、我が国のように英和辞書がこぞって、*England* に「英国」の訳語を与えている所では、学習者の誤解がいっそう助長されるのではないかと思われる、その点でも現行英和辞書の〔*England* の項の〕訳語および説明は、単に不十分であるという以上にはなほ非教育的である。

## (2) 大学の英語教科書の邦訳名はどうか

アングロ・サクソン文化と深く関わって来た我が国の英語・英文学・英語教育界で、*England* がどのような取り扱いを受けて来たかは興味ある問題だが、ここでは大学の教科書の中で英国関係を扱った教科書のタイトルと邦訳名の異同について、これまた限られた資料ながら触れて見たい。まず(A)では我が国で発行されている教科書の中から *England* あるいはその派生語をタイトルに使っているものを任意に18点ばかり選び、それらの英語のタイトルを挙げ、(B)では(A)に対応する邦訳名を挙げる。

(A) ① K. Čapek: *Letters from England*, ② W. R. Inge: *England*, ③ Wendy Hall: *Life in England*, ④ J. Kirkup: *England, My England*, ⑤ P. Carr: *The English are Like That*, ⑥ H.W. Nevinson: *The English*, ⑦ S. A. Pardon: *A Brief Glance At England*, ⑧ P. Milward: *England through the Ages*, ⑨ W. Dibelius: *English Characteristics*, ⑩ P. Milward: *The Englishman As He Is*, ⑪ P. Milward: *England, America, Japan*, ⑫ P. Milward: *A Journey Through England*, ⑬ R. Goodman: *England Ho!* ⑭ P. Milward: *The Changing Face of England*, ⑮ Septima: *Something About England*, ⑯ R. J. Emery (editor): *England As She Is*, ⑰ H. Guest: *Another Island Country*, ⑱ N. Straeatfeild: *The First Book of England*.

(B) ①「イギリス通信」、②「英国」、③「イギリス風物誌」、④「イギリスという国」、⑤「イギリス人」、⑥「英国国民」、⑦「イギリス風物誌」、⑧「イギリス文学の史的背景」、⑨「英国国民性」、⑩「イギリス人の素顔」、⑪「イギリス、アメリカ、日本」、⑫「ミルワードの英国歴史

紀行」, ⑬「イギリスへの船旅」, ⑭「イギリスの心」, ⑮「イギリスの12ヶ月」, ⑯「あるがままの英国」, ⑰「もうひとつの島国——英国・その現代と展望」, ⑱「イギリスの素顔」。

このように並べて見ると, England=「英国」という等式がここでも極く一般的であることがただちに判る。もちろん, 深く考えれば事はそれ程単純ではなくなる。外国人が loosely に *England* を使うという事実を思い出して見ると, 上述した作品の中で Čapek, Inge など外国人作家の意図は, ことによると England=Britain という理解の上に立って, *Letters from England* といったタイトルを付けたとも考えられる。邦訳名もそこを読んでのことだとすれば, (B)の邦訳名は正訳ということになりそうだ。しかし, 問題は中身であって, England, Englishman をタイトルに使った上述の作品で, アングロ・サクソンの民族・言語・文化と同等あるいはそれ以上にケルトの民族・言語・文化にスペースをさいているのはただのひとつもない。したがって, 作者の意図が何であれ, タイトルの *England* は *Britain* とイコールにはならない。

### (3) 検定教科書の扱いはどうか

大学の英語教育の場合は, テキストの選択権が教員にあるのが現状であるから, その限りにおいて思想の自由は保証されていると言ってよいであろう。しかし, 高等学校の場合はひとまずおくとして, 中学校の場合は, 現場の教師にはほとんど選択権がない上に, 広域採択制度など様々な事情で今日全国500万の中学生に対し僅か5種類の教科書しか存在しない。現場教師に選択権もなく, 未だ判断力が十分ついていない中学校の生徒に検定制度のもとで半ば強制的に与えられる中学校の教科書は, それだけいっそう重大な社会的責任を担っていると言ってよいであろう。しかも外国語の教科書は異文化理解教育の要であるから, その点で教科書なんぞどうでもよろしいということには決してならない。

現在発行されている中学校の英語の教科書は, ① *New Prince English Course* (開隆堂), ② *New Horizon English Course* (東京書籍), ③ *New Everyday English* (中教出版), ④ *Total English* (秀文出版), ⑤ *New Crown English Series* (三省堂)〔以上いずれも56年度版〕である。さて, 問題の *England* を5種類の教科書がどのように扱っているだろうか。結論から言えば, ④と⑤の対応が正確で, 他の3種類の教科書は落第で

ある。以下に問題の個所を引用して示す。

① *Taro*: I'm sorry, Dad. I got a 'C' in English again.

*Mr. Hara*: That's all right. But don't give up. English is studied all over the world.

*T*: I know that. English is used in England, America, and many other countries.

*Mr. H*: Most business letters are written in English. Information is given in English at every international airport in the world.

② Mike's father, Mr. Smith, is in London now. He has been in London for two days. He will spend about two weeks in England, and then go to France. During his stay in London, he is going to see Mike's cousin, Bill.

Bill is a college student. He came to England two years ago. He has been in London since then.

③ Judy likes reading books about American history. One day she read the story of Thanksgiving Day.

One hundred and two English people left England in December, 1620. They had to go across the sea in a small ship. The ship was the Mayflower.

It was a very cold winter. The Mayflower arrived at New England after a lot of trouble.

中学校の英語教科書では、通例巻末の新出単語には訳語が示されているので、著者がどのような意味で *England* を使っているのかそれを見れば一目瞭然となる。②や③のように英文を読んだだけでは著者の意図がただちに判らない場合も、巻末の訳語〔英国、イギリス〕は著者の意図をごまかせない。①はアメリカや他の国と並列して出て来るわけだから、「英国」の意味で使われていることは否定しようもない。英国で英語が使われているのは、COD の説明の通り、*England* だけでなく U. K.

全体である。このように5種類のうち3種類の教科書までが *England* を「英国」と記述しているのには著者の英国観や英語観とは別にもうひとつの原因がある。それは、文部省の指導要領である。指導要領の別表(1)に掲げられた中学段階での必修単語の中に、*England* が *Japan* や *America* と共に挙げられて来た(ただし52年度に発行された指導要領では削除された)のであるから、文部省の理解も *England*=*Britain* ということになり、それがそのまま教科書に反映していると見ることもできるが、*England* に関する文化意味論上の誤解が官民一体という構図は笑っては済まされぬ。

ついでながら、ある調査の結果に触れておきたい。筆者はある所で講演した折に、上述の中学校のテキストに *England* が登場する個所に訳を付けて提出してもらった。出席者の中で提出してくれた人全部で16名(職業別によると教師4名、会社員3名、学生7名、不明2名)。そのうち *England* をイギリス[or 英国]とした者13名、イングランドとした者3名〔内学生2名〕という具合であった。まずは極く平均的な反応であろうと思われるが、以上述べて来た辞書の訳語や、教科書の扱いなどを考慮すればむしろ当然過ぎる結果と言ってもよいであろう。

## 第 2 章

*England* およびその派生語が辞書や教科書でどのように使われているかは別にして、現実に *England* や *Britain* (およびその派生語) が現地でどのように使われているのか一瞥しておきたい。当然のことながら公式文書や *Guardian* のような代表的なジャーナリズム、あるいは BBC に代表されるマスメディアでは、*England* を「英国」の意味で使うことはまず絶対と言ってよいほどない。東京の英国大使館文化部(British Council)から最近送られて来た Specialized Courses for Advanced Students of English のコース紹介の brochure の中に、コースのひとつとして Inside Britain があり、その紹介文には *England* は一度も登場しない。「英国的ユーモア」と言えば English humour (or English sense of humour) の翻訳 (cf. L. Cazamian: *The Development of English Humour*) だと思いついでいる人間にとっては、この紹介文の一節 (The course will not only include formal subjects such as law and order,

education and government etc., but also more light-hearted topics such as folk music, food and drink, and the unique British sense of humour.) を目にして若干の異和感を持つのではあるまいか。この brochure の作成者がたとえイングランド出身の者であったとしても、impersonal でなければならない公式文書では「英国」の意味で *England* を使ってはならないというのが常識になっているからであろう。

この事情は公平を旨とするジャーナリズムの場合も変わらない。**Why England are so poor** (*Guardian* 26 Dec. '82) はクリケットの試合を伝える記事の見出しで、*England* が「イングランド」という地方を代表するチームの換喩として使われているわけで「英国」の意味ではない。政治面での見出しは **How Britain lost its veto on the US bomb** (*Guardian* 22 Feb. '83) **The New empire within Britain** (*New Society*, 9 Dec. '82) などがかもっとも典型的で Britain を England で代用するなどということはまず100パーセントないと見てよい。前者について、もし England で代用すれば、第2次世界大戦にウェールズやスコットランドは関わり（少なくとも公式的には）なかったことになる。さらにまた、後者について *Britain* を *England* で代用すれば、イングランド内部のファッションについて語っていることになり、ウェールズやスコットランドは無関係になる。以上のように公式的で個人の感情や心情を抑えて表現することを期待されている文章では England と Britain の区別は明確で疑問の余地はない。

England はあくまでイングランド地方を指すといった本来の使い方は、ケルト民族との関わりや、ケルト民族の視点からイングランドが語られる時にもっとも明確な形をとって表われる。ウェールズの住宅問題 ([資料] (2)参照) を扱った記事——Owner occupation does not, it seems, cure all manner of environmental ills. Nor does the purchase of holiday homes by English people——の中の English people はまぎれもなく「イングランド人」である。「英国人」ではウェールズ人まで含むことになって、イングランド人が多くの別荘を所有しているという事実と符合しなくなる。しかし、きわめつきは Welsh nationalist のひとり Aberystwyth 大学で現代英文学を講ずる Ned Thomas 氏の次のことばであろう。The Welsh language community does not have defenders in England among those educated, liberal

Englishmen who sympathize with minorities everywhere, from the Nagas to the Basques. They are unconcerned about the depth of resentment within the Welsh-speaking community because they are unaware of it .... How many Englishmen have ever thought of learning the Welsh language? Very few, because the image of Wales in England (well-represented in Evelyn Waugh) is provincial, unglamorous and comic (N. Thomas: *The Welsh Extremist*, Y Lolfa, 1978). この文章など、ほとんど蛇足を必要としないほど明確であるが、この文章を読めば、英国内の少数〔ケルト〕民族の視点に立つと、*England* を *Britain* と同義で使うことがいかに妥当性を欠くものか理解できるはずである。

前述した Ned Thomas 氏の文章などは、イングランドとウェールズの歴史的関係を理解している者にとっては誤解しようもないものだが、以下に示すように、イングランドの人間の手になる物は、イングランドが英国内における政治・経済・文化の中心地域であったために、外国人にとっては一見極めてあやうい筆運びとなる。Warwick 大学で政治学を教えている〔イングランド人の〕Licoln Allison の手になる *Condition of England*, Junction Books, 1981 は、今までの日本の知的風土を考えれば、『現代英国文化論』という邦訳を付けても何ら怪しまれないであろう。実際、① ... England has been planned rather better than Italy or France. (P. 96), ② Finally, I began a physical exploration of England, a country which I had always assumed that I knew reasonably well. (P. 7), ③ I was always intrigued by the attitudes of the English in California. (P. 6) などのように、ケルト民族との対比ではなく、*England* や *English* がそのものズバリで登場すると、ケルト民族とアングロサクソンの関係を熟知している者にとってもちよっと待てよと言いたくなるであろう。

しかし、*Condition of England* が厳密には、〈現代イングランド文化論〉であって、本書に何十回にも亘って使われている England (English) がことごとく「イングランド」「イングランド(人)の」の意味で使われているのは、次の一文を読むと明確になる。

I have argued that the culture of England is not like that

of other countries; it is less easy to define and the threats to it are more subtle. Plaid Cymru (=Welsh National Party, 筆者註) defends the culture because it defends the Welsh language and literature which define that culture ... It is far-less clear what English culture is and what the threats to it are ... (P. 51)

この文章を読むと、著者が England を政治（あるいは行政）上の単位としてというよりは、様様な文化的特質を共有する民族上の単位としての〈国〉(a country) と捉えていることが明らかになる。このことは、I, for one, had shared De Gaulle's belief in the 'Anglo-Saxons', thinking the Americans and the English to be two branches of a common culture. (P. 2) が裏書きしている。「英国人とアメリカ人が共通の文化を持つ」のではなく「イングランド人とアングロ・サクソン系アメリカ人が共通の文化を持つ」のである。このように England が「イングランド」を、the English が「イングランド人」を指す、と考えるのが正しい認識であり正しい使い方であるが、このように考えると、English History はあくまでも「イングランド史」であり、「英国史」は History of Britain (or British History) となるべきである。「英国史」はあくまでも英国全体に関わる歴史であるから、イングランドだけを問題にした、あるいはイングランドを中心にした作品を「英国史」と称するのは間違いである。最近有斐閣から出版された青山吉信・今井宏編『概説イギリス史』は、「伝統的史観の枠組みをこえて再構成し」たイギリス史ということになっているが、ケルト族について触れた部分は287頁中30頁足らず、しかも、その30頁がほとんど英国を形成する歴史の初期の部分に集中していて、現代英国の問題との関わりではまったく無関係な存在として無視されている。ことのついでにもうひとつ挙げれば、これまた最近研究社から出版された『イギリスの生活と文化事典』も、アングロ・サクソン文化一辺倒という伝統的な英国観から脱け出てはいない。例えば、ウェールズなどざっと1,000頁中10頁にも満たない取り扱いである。いくら人口270万で母語の Welsh を話す人間が50万程度しか（本当は50万もと言うべきである）いないとしても、これではいかにも一方的だと思う。それとも編者はウェールズの文化など十分

なスペースを削ぐだけの価値がないと考えているのだろうか。それならそれで、「イギリスの生活と文化」というタイトルは「イングランドの生活と文化」に改めるべきである。ここではほんの2例しか挙げなかったが、要するに、我が国で「イギリス (or 英国)」の名称を冠したタイトルで出版されている数多くの書物・論文・エッセーが、ケルト族を真正面から取り扱っていない現状は、単にミスリーディングというだけでなく、英国にはアングロ・サクソンの民族・言語・文化しか存在しないという誤解を与える点で、英国の実像を歪め日英間の理解に奉仕しない、ということを書いたかったのである。

English History を「英国史」(あるいは逆に「英国史」を English History) とすることが厳密には間違いであるということを書いたついでに、既に日本語としても熟してすっかり定着してしまっている2・3の訳語についても若干コメントしておく必要があるだろう。「英国的ユーモア」「英国紳士」「英国的偽善」はそれぞれ English humour, English gentleman, English hypocrisy の翻訳だが、原文は厳密には「イングランド人のユーモア」「イングランドの紳士」「イングランド人流の偽善」を意味していて伝統的訳語は間違いである。あまりにも馴れ親しんで来た伝統的な訳語であるため、我々はその訳語の妥当性に思いを至すことがなかなかできない。しかし、我々はこのような訳語〔コトバ〕を通して英国像〔思想〕を造り上げて来ただけに、実像を歪める訳語は追放し新しい訳語を創造していく必要があるだろう。

次に英語を母語としない人達が、*England* をどのように使っているか、そのひとつの典型としてアフリカ人の場合をとり挙げたい。Ali A. Mazrui: *The Political Sociology of the English Language*, Mouton, 1975には、例えば、英語を母語としないユガンダがなぜ国語として英語を採用しなければならなくなったのかを述べた Milton Obote の演説草稿など、アフリカにおける民族の固有性 (identification) と英語の問題に触れた切実な言語論が収められているが、ここでは *England* に関わる表現に限定して若干の考察をしておきたい。

論文のひとつ “The King, the King’s English and I” は、ユガンダの王様 Edward Mutesa と平民である著者の出会いを中心に、ふたりの人間形成とアフリカにおけるナショナリズムの発展に英語がいかにかに決定的な鍵を握っていたかを論じたものだが、中でも ... had he

(=Mutesa) been ignorant of English ways, this fact (=being ignorant of English ways) would have been decisive in putting the throne beyond his reach. は、イングランド政府のとった植民地における間接統治の中で、英語が人間の社会的地位を決定する要因であったことを証明していることばとしても見逃せない。著者は、... at a certain level of education in the colonial period, how some one used the English language was a more important criterion for evaluating him than what he actually said in the English language (P. 35). とも言っているが、この一文は、複数の言語が使われている所で、そのうちのひとつが社会的に圧倒的に優勢である場合、その優勢な言語の使い手が、その言語を使うことが出来るというだけで、どのような評価を受けるかという一般的な真理をいささかクルードではあるが雄弁に語っている。

さて、この論文の中に次のような一節がある。With that English upbringing he had had as Kabaka, England was like a second home to him. His Cambridge days had and even his exile had deepened further Mutesa's basic Anglophilia (P. 36). ちなみに、文中の he は、前述した Edward Mutesa. English upbringing はイングランド人を家庭教師に迎え徹底したイングランド風の教育を受けたことに言及したもので、結果として、Mutesa をして "Oddly enough, I was more fluent in English than in (母語の) Lugada." と言わせることになった。この論文の中では Britain は一度も登場しない。しかし、それがむしろ当然だと言えるのは、最後の一語 Anglophilia が象徴するように、徹底した英語修得がアングロ・サクソンへの異常な傾倒を生み出したからである。Anglophilia は英国内の異文化を見えなくさせる危険を持つのはアフリカ人だけでなく日本人の場合も同じである。文中の England は「イングランド」であるよりは「英国」そのものという意味で使われているように思われる。ただし、著者自身は England と Britain の文化意味論上の区別を十分承知しているながら、Mutesa に代表される当時のアフリカ人一般の [England の] 使い方をそのまま再現して見せようとする意図があったのかも知れない。いずれにせよ、植民地での指導者の大部分がイングランドの出身者であったという事実は、被支配者の英国観なり England の意味論上の認識方法に決定的な影響を与えたように思われる。

著者が Britain と England の区別をきちんと認識していたと考えられるのは次の一節を読むとよく判る。——① An African educated in England could indeed hate England but he might also make a few friends. Even if he did not make friends, he was bound to find out that not all English people were “colonialist” in their sympathies. He might find himself marching with British radicals against this or that policy of the British Government (P. 50). ② The mother country, England, is now overshadowed by her former imperial extension—and there is the possibility of Britain becoming an extension of the United States rather than the other way round (P. 71).

たしかに、歴史的に見るのなら植民地主義、と(大英)帝国主義、拡大主義を押し進めたのは England であって Britain ではない。その点で England を mother country と考えるのは本質的に正しい。mother country は国内の他民族を征服して Great Britain を築いたのであるから Britain と England が歴史的に見ても同一にならないのは当然なのである。上述の文章で、現時点での United States との対比では *Britain* が使われているが、それは著者の歴史に対する認識を示す一節ともなっていると思う。

### 第 3 章

最後に、英国内少数民族の立場からすると England がいわゆる〈差別語〉の一種として機能し得る(あるいは、している)ものであることを論じておきたい。

小説家でスコットランド人の Angela Carter が、*New Society* (7 Oct. 1982) に、*So there'll always be an England* (「かくてイングランドは永遠なり」)というエッセーを寄せている。著者が通っていた小学校で、第2次大戦後もしばらく続いていた Empire Day (大英帝国記念日)の催し物を枕にして始まるこのエッセーは、the idea of Britain was English invention で、Britain=Greater England であることを挑戦的なことばで綴ったものである。このエッセーの枕になっている「行事」の内容は象徴的な出来事だけに一筆の価値があると思う。呼び物はパレ

ードで、必ずイングランド代表の少女が女王様に扮し、両側には、ウェールズ、スコットランド、アイルランドを代表する少年が民族衣装に身を固めて女王様の attendants よろしく行進し、「女王」を玉座に着けるのである。この時の行進曲がイングランドの愛国歌 *There'll always be an England* (「イングランドよ永遠なれ」) で、著者はこうした光景を極めて nasty だと書いている。nasty とは「猥雑な」ということだが、事柄の核心に迫った一語であると思う。

そもそも、Britain ということばがいつ頃から使われるようになったのかつまびらかではない。しかし、Stanley Baldwin (1867—1947) が1924年5月6日、Hotel Cecil でイングランドの守護聖人 St. George を記念して行った演説草稿 (“On England and the West” — *On England*, Philip Allan, 1926) の冒頭には、Though I do not think that in the life of a busy man there could be placed into his a more difficult toast than this, yet the first thought that comes into my mind as a public man is a feeling of satisfaction and profound thankfulness that I may use the word “England” without some fellow at the back of the room shouting out “Britain”. と書いているから、今世紀の初頭には England を Britain の代用として使われることをいさぎよしとしない空気はかなりあったことが推測できる。この演説はイングランド人だけの集いで行われたものであるため、全体として気楽なトークとなっているだけにそれだけ真情がつい口を突いて出たといった趣があり、イングランド人の思考のパターンを考えるのに恰好の資料となっている。Baldwin は、同じ演説の中で、① To me England is the country, and the country is England. ② ... the English people are kindest people in the world. ③ They (=the English people [イングランド人]) go overseas, and they take with them what they learned at home: love of justice, love of truth, and the broad humanity that are so characteristic of English people. 等々と述べているが、全体として、当時のイングランドの知識人の〈独善性〉が、ナイーブに、あるいは臆面もなく語られているところが興味尽きない。①では England 以外は国として認めないという姿勢が伺え、②③では、love of justice を身につけたはずのイングランド人が、なぜウェールズ人から母語を奪ったり、阿片戦争などの原因を作り得たのか——

その辺に思いを至すことのできない、いわば〈対内道徳〉としての love of justice しか頭になかったという独善性が伺えるのである。この文章の中で使われている England は、表面的には「イングランド」を指しているものだが、イングランド以外を国として認めてはいないという意味で England を Great Britain の代表、つまり England=Great Britain,あるいは Angela Carter のことばを使えば、深層において Britain=Greater England という意味で使われているものと見たい。

問題は民族固有の言語・文化をどのように考えるのかということに帰着するであろう。もし、それぞれの民族固有の言語・文化を1945年までの拡大主義、旧帝国主義時代にあったように、国家の名(あるいは特定の民族の呼称)において無視あるいは抹殺することが道徳的に悪だと考えるのならば、*England* が差別語として機能して来た現実を目をつむるべきではない。

そこで最後に *England* を差別語として機能させないため現実的な提案を提出して小論の結びとしておく。

(1) 記述の内容が英国全体に関わり、特定地域の名称をもって英国全体を指すのが不相当だと考えた場合、(Great) Britain, U. K. などを使うのは止むを得ないであろう。(Great) Britain と U. K. では U. K. の方が単に事実即した表現で emotional coloring がないだけ個人的には好ましい表現だと考えるが、これは大した問題ではない。*Britain* を使う以上記述の内容は、英国内の特定民族だけを対象にしてはならない。

(2) *England* を「英国」とするのは、たとえ一部の本国人がその意味で使っているとしても、ケルト民族を無視していることから、〈差別語〉の一種となるのでやめる。

(3) *England* に関する英和辞書の記述はあくまで「イングランド」とし、「英国」を載せない。ただし、注として『「英国」の意味でイングランド人や外国人によってばく然と用いられることがあるがそれは誤り』といった趣旨の記述を加える。

(4) England, Wales, Scotland などはそれぞれ民族・言語・文化的にひとつの独立した「国」と考えられているので、各項目に「[文化的特性から見た] イングランド国」「ウェールズ国」「スコットランド国」などの訳語を加える。

(5) English (形) は「イングランドの」 the English は「イングランド人」とし、「英国の」「イギリスの」「英国人の」は訳語からとる。

(6) 言語に refer している English の訳語に、「[イングランド地方で使われる] イングランド語」を加える。

(7) 中学段階でのことばの扱いは、学習者の外国像を造り上げる上で極めて重要であるので、特に注意が肝心である。England の扱いは徹底して「イングランド」とする。

(8) 「英国」に関わる書物・論文などの邦訳名も従来のように無造作に England=「英国」とはしない。このような観点に立つと、J. R. Green: *A Short History of English People*, 1902 (邦訳 中村祐吉『イギリス国民史』鹿島研究所出版会) は、『イングランド国民小史』のような邦訳をあてることになる。

#### (資料)

(1) A land of bowler hats ...

IT MAY interest your readers to see themselves as they are seen by others. The following comments were written by Italian students during their first year of English at university:

In England we'll not find a cafe—there are in fact only “pubs,” but there we cannot sit and talk with our friends.

The English gentlemen like to dress in a traditional way. Usually they wear bowler-hats, striped trousers and black jackets and carry an umbrella and a paper.

Englishmen respect tradition for the presence of (the) queen helps to maintain the past.

In English schools most afternoon lessons are devoted to games or sports (because) in England sports are a moral education.

I would quote extensively from the student who listed fox-hunting as one of the most popular sports in Britain, but the local trafficwarden's rendering of Figaro combined with the sound of yesterday's government falling and my landlady's screaming gesticulations under my nose (a sure sign that the spaghetti is almost ready) prevent me from continuing. However, I would be pleased to hear from anyone who can provide me with the views

on Italy of a similar section of British society. —Yours faithfully,

**S. J. Tauroza,**

Siena University,

Via V. Veneto 69,

52100 Arezzo, Italy.

(2) Home again to Wales

DAVID WALKER writes: Thanks to Y Swyddfa Gymreig—the Welsh Office—the Department of the Environment has no excuse to delay any longer publication of the 1981 English House Condition Survey. For the Welsh have just published their housing survey (£3, from the Welsh Office, Cardiff), run in parallel and on the same methodology as in England. What has been happening to housing in West Glamorgan and Powys has happened in West Yorkshire and Avon. Now results have been quantified it seems that John Stanley, the Housing Minister, may have good political reasons for sitting on the English survey.

The Welsh figures raise disturbing questions about both the future of owner occupation and the condition of second homes—two categories of housing close to the Conservative bosom. Unfit housing, the survey says, is a private sector phenomenon; the majority of unfit dwellings in Wales are owner occupied.

It seems that as owner occupiers get older, their ability and willingness to maintain their homes declines; and as the elderly increase as a proportion of owners, unfit figures rise. In Wales over 14 per cent of pensioner's homes are unfit. To bring them up to a minimum standard of repair would cost £700 million. Of Wales's 91,000 unfit dwellings, two thirds are lived in by householders with a head who is outside the labour force and 25,000 are lived in by pensioners.

Fewer houses in Wales are unfit than in 1976, but there has been an increase in the incidence of disrepair. The Welsh Office says: "The cost of the work now needed to bring the dwelling stock up to a satisfactory minimum standard has increased since 1976 by more than the rate of inflation": ie, the overall state of repair of the Welsh housing stock has deteriorated; from a cost

per dwelling (in 1981 prices) of £1,100 in 1976, repairs would now cost £1,850.

Owner occupation does not, it seems, cure all manner of environmental ills. Nor does the purchase of holiday homes by English people. According to the survey, 5,000 of the 30,000 second or holiday homes in Wales are unfit. But unfitness and disrepair are also to be found in abundance in "first" homes in England. When will we be allowed to know how bad things are?

*(New Society, 9 Dec., '82)*